

広報

土づくり



第 6 号
発行所
(株) 土屋
土屋新聞
土づくり編集部

山形在住で脳性麻痺の齋藤直希さん。行政書士の資格を取り、福祉行政や法律に携わる活動をされています。
「同じ、多くの困難を乗り越えて、養護学校から普通高校へ進まれた齋藤さんに、障害に関わってさまざまな問題についてお話を伺いました。」

現在の活動

「一般社団法人 障害者・難病者自律支援研究会」の代表理事です。以前は、「障害のある人々と共に」の政策研究会山形」の代表を務めて、いろんな障害をもった方々と、制度や政策について学んでいました。例えば、脳性麻痺者が使える制度や重度訪問介護制度で使える具体的な内容などかですね。県や市の出前講座も開いて、行政や福祉担当の方からお話も聞いていました。ただ、参加者の体調や移動手段、制度・政策の難易度、異なった障害をもつ者同士の理解の難しさなどの問題で辞める人が出てきたり、そこに私の個人的な諸事情が起きて動きにくくなってきました。この度、社団法人化した「障害者・難病者自律支援研究会」では、障害の違いを理解し合うこと、そこから、健常者との関係を視野に入れて、健常者と障害者の相互理解の本質について深く考えていきたいです。また、「自律」には自らを自らでコントロールするという意味を込めましたが、自分はこうしたいなど、支援を受けながら自分の生き方を自分で決めるにはどうしたらよいかを学びなおそうと思っています。そして、社会が良くなるよう、法を守りつつ、それを変えていきたいですね。

子ども時代、父からの虐待

私は物心つく前より、父親から言葉の虐待を受けていました。当時の山形では、障害者の親になると、とても大変だったんです。周りからの白い目にも耐えて生きていかなければならない。そうすると、子どもにも色々起るんです。「こみ扱いされましたね。「なんで生まれてきたんだ」とか、母親には「なんでこのごみを産んだんだ」と。外にも出してもらえませんでした。そういう外からは見えにくい虐待でした。それでも父親がいて、母親がいて、だから今の私がいる。マイナスな部分は確かにありましたが、そこから学んだ部分もあつたんです。それが逆に私を強くしてくれたと、今は受け止めています。

世の中には決まりの事がある！〜法律への興味〜

小学2年生の時、豊臣秀吉の奥方を主人公にしたNHK大河ドラマ「おんな太閤記」を見たのをきっかけに日本の歴史にはまりました。そこで、世の中には決まりの事があると知ったんです。もともと私が一番尊敬しているのは秀吉ではなく徳川家康です

が。彼は小さい時から人質になったりで、すごく苦労している。でも、どんなに苦労がなくても諦めず、みたいなどころが好きで。忍耐と苦労の積み重ねで、江戸時代の礎を築いた人ですね。そこから、大宝律令や御成敗式目、武家諸法度といった法令など昔の決まり事に興味を持ち、それが現代だと法律に当たると分かった。私は虐待や辛い経験を色々としていたので、決まり事をちゃんと理解すれば、家族や自分の問題を解決できるんじゃないかと思っただけです。ただその頃は、そう思ったらいけないの悪い例だけでしたね。

人生の転機、養護学校から普通高校進学への想い

法律を学ぼうと思ったのは中学生時代です。私は小学校高学年で手術を受けたんですが、その病院で出会った2人の友人と養護学校で再会しました。そのときに、3人で普通高校に行くという話になって。けれど、それを母親に言うと、しこたま怒られました。「遊びに行くんじゃない。養護学校から普通高校って、どんな大変かわかるか！他の子たちもいろんな夢持って学校に行くんだから、それを邪魔することはできない。大学へ行くために勉強するとか、そういう理由でもなかった



ら入れんぞ。覚悟はあるか！」って。それで自分の人生を考え直すことになったんです。そうして、法律を勉強するために山形大学の人文社会学部法学科に入ること。そのために普通高校に行くこと。というのも、養護学校の高等部では、大学に行く教育はしていないという現状があるからです。けれど、普通高校への道のりは大変でした。

困難を乗り越えて

普通高校に入学するには、まず学力を証明する必要があります。私の場合は毎日新聞社主催の読書感想文の全国コンクールで3位相当の賞を取り、それが決め手になりました。その頃、幸運にも養護学校で校長が変わったんです。前校長は保守的でしたが、新校長は考え方が先進的で、成績が良ければ交渉すると。それで英検や模擬テストも受け、その結果、高校との交渉が始まりました。残念ながら一番望んでいた進学校には入れませんでした。ただ今でも覚えているのが、母親はその高校に交渉に行った時、「なんでうちを選んだんですか。高校なんてそこへんにいっぱいあるべ」と言われたと。校長室で泣いたと聞きました。

いよいよ普通高校入学へ

普通高校進学を心に決めたとき、高校側には「求めない、頼らない、責任も問わない」と伝えていました。それは入学を絶対に断られないようにするためでしたが、その分、介護の負担は母親にいきます。でも、母親は「お前が本気で受けるんだつたら、頑張る。おんぶしてでも、つきつきりで介護する」と言ってくれて。「でもお前、真冬でも廊下で授業する覚悟あるか。いじめられようがいんだか」とも言われましたね。その覚悟の上で先述の高校との交渉だったので決裂。ですが山形中央高校は「頑張れよ」と言って下さり、試験を受けました。当時は今よりは手が動きましたが、そ

それでも圧倒的に健常者よりは文字を書くスピードが遅い中、受験しました。ともあれ合格する事ができましたが、高校側は合格通知を出すか否かで真つ二つに割れていたそうです。

孤独な高校生活

高校時代は、トイレも移動も母親の介助で、3階までおんぶしてくれていました。なので、同級生との会話は挨拶くらい。というのも、私の方がカルチャーショックが強くて、何を話したらいいのか全然分からなかったんです。声をかけてもらっても、「あ、うん…」みたいな。生活サイクルは違っし、行き来も母親のおんぶで。食事も皆が集まって食べるけど、私は母親に準備してもらい、犬食みたいな感じで食べていたので、なので、ほんとに無口でした。けれど、勉強しに来ただからと割り切つて、勉強に逃げたんです。高校3年から大学受験という共通のテーマができたので、私もようやく慣れてきて、それでやっと話せるようになりました。それまで友人を作らずもつたない気持ちがあったので、山形大学人文学部法学科に入学した時に、そんな自分を変えようと思つたんです。

思い出の大学生活

大学も母親の介助で通いましたが、私が入ったことで改善費が国から出て、エドター設置等が決まりましたね。そして、法律関係のサークルに入りました。山形大学模範裁判という、裁判劇の山大公式学生組織です。学生たちが裁判のシナリオを作って演劇として発表します。その時にきちんと裁判の手続きや、各種法律を研究します。例えば刑事事件だったら刑事手続法に則つて起訴状を作り、反論や弁論、判決文も書いて最後に現職の裁判官に見てもらい、最終的に公演をします。私の担当はシナリオライターで、過労死や整理解雇を扱いました。大学やサークルの友人とは、今でも緩く繋がっています。



障害者に対する日本の教育制度の問題

日本は障害者の教育に対して、二十何十年もほぼ進歩していません。まず、養護学校から普通高校に進学するのはハードルがとても高い。それは、学習内容の違いが大きく、受験勉強をさせる、させないの裁量権を養護学校側が持つているからです。そして、高校に関しては、養護学校には高等部があるから、そこに行けばいいという認識がある。それに最終的には校長決裁です。校長がダメだと言えばダメ。なので普通高校進学はほぼ不可能。ある特別支援教育関係の方から、私のように養護学校で義務教育をかつつりやつて、公立高校に行くつて、国立大学に行く事例は、今でもほとんどないと言われました。これは、教育制度の改革が全く進んでいないということです。障害者の教育制度がまだまだ整備されておらず、これも大きなバリアです。一番大事な教育が遅れているというのは、本当に問題だと強く思いますし、もう私の母親のような苦勞は誰にもしてほしくないというところから、教育の場で重度訪問介護が使えないのは、本来、由々しき問題だと考えます。教育とは、教育サービスを消費する活動とも言えます。だが、通学には使つてはいけないとなつていて、そこが変わるだけで状況は全然違つてくると思います。

介護の人間関係、誰でも人権がある

当事者としては、ヘルパーさんにきつく言いたくなる気持ちは正直分かります。やはり相性があると思うんです。極論を言うと、嫌いな人には自分の体を触つて欲しくない。けれど、まず思うのは、ヘルパーさんは仕事で来ているのであつて遊びに来ているわけじゃない。同じ人間で、人権があります。障害者だからといって他人の人権を侵害していいのか、感情を大切にしないのか、自分が嫌なことをされたら嫌なんじゃないか、と思うわけです。「相手の気持ちになつて物事を頼みなさい」というのが母親の教えでした。私はそれは間違つていないと今でも信じてるし、相手の気持ちは大切にしたい。もちろんヘルパーさんには障害者のやるせなさや不安とか、そういう当事者の気持ちを理解してほしいです。障害受容とは本当に大変なんです。言えない悩みだつてある。でもそれをむき出しにしたつて仕方ない。だから、こちらも理解してもらう努力をしよう。それにヘルパーさんにも、「この人に支援して良かった、時間を共有して良かった」と思つてもらいたいですね。ヘルパーさんには支援の質をさらに向上させて、支援の本質を考えつつ仕事をしたいです。介護の専門性を広く持ち、担当の利用者のことなら全部わかるよ、くらいの支援をしてほしいと願っています。相互理解の為に。

家族あるある

今日も元気だ、
空気がうまい!

今日も元気だ、空気がうまい!これは私が高校生の時に一人暮らしを始めた初日、引越越し業者のお兄さんが、運んでいた鏡に映つた自分の顔を見ながら言った言葉です。不思議なのですが、この言葉で私の不安な気持ちが吹っ飛んで行きました。とても気に入つて、40年近く経つた今でも、胸の奥にモヤが掛つたような不安から解放された瞬間や、解放したい時に口に出しています。今朝も唱えました。夫は就寝中に喉の筋肉が虚脱して時々無呼吸になるのですが、そんな時に私は暫く夫が生きているか様子を見ます。そして彼が「ぐあつ!」と大きく息を吸つたのを確認して私も眠る、を繰り返しています。思えば娘が赤ちゃんの時に授乳しながら寝てしまつて、ハツと気が付いて生きているかを確認しました。それと同じです。「とにかく生きていればそれでよし」そんな気になる瞬間です。朝が来て家族全員がちゃんと起きてくるとホツとします。今日も元気だ!空気がうまい!おいしく感じられるのは何て幸せだろう!こういう嬉しいと感じる言葉を自分に聞かせると、幸せが倍になる気がします。明日も唱えられましように。

（もとゆみ）

広報土づくりへの

ご意見・ご感想

今後取上げてほしいテーマなどをお聞かせください
また、ホームケア土屋、訪問看護ステーション土屋のサービスについて、株式会社土屋の取組みについてのご意見もお寄せください。

ご意見・お問い合わせ窓口

client@care-tsuchiya.com

株式会社 土屋

本社：岡山県井原市井原町192番地2久安セントラルビル2階

総アテンダント数1244名

ホームケア土屋41拠点（38都道府県）

訪問看護ステーション土屋2拠点

土屋ケアカレッジ10校舎

デイホーム土屋1拠点

2021年8月現在

